

# 妖狐玉藻像の展開―九尾化と現代的特色をめぐる―

伊 藤 慎 吾

## はじめに

妖狐玉藻の前は天竺天羅国から中国周王朝に渡って国を滅ぼし、渡海して日本で仏教を滅ぼそうとした齢八万歳の狐である。その玉藻を描いた説話・物語は、中世に生まれた。その代表となるのがお伽草子の『玉藻の草紙』である。これは単なる読み物としてだけでなく、絵巻としても受容され、続いて絵本に仕立てられて広く流布した。そればかりでなく、能「殺生石」、浄瑠璃「玉藻前おのゝたもと」に代表される芸能、さらに浮世絵などの絵画の題材などにもなり、芸能や美術の分野でも展開されていくことになった。那須の殺生石の由来ともなっている。近世には、もちろん文学としても改作されて『絵本三国妖婦伝』『絵本玉藻譚』『玉藻前悪狐伝』やパロディの草双紙「玉子の前由来」などが生み出された。ただ、その改作は単純に当世の嗜好におもねるようなものではなく、それぞれ種々の工夫がみられるが、中でも大きいのが九尾化ということだろう。

九尾の狐自体は中国古代の文献に子孫繁昌などの予兆をする一種の瑞獣として記されており、食べれば怪異に会わないとされるが、それとは異なる意味合いを持つ妖狐は明代の『封神演義』に登場し、玉藻はその影響を強く受けたとみられる。

こうした近世期における大きな変容に続き、近代においては大正七

年の岡本綺堂『玉藻の前』がその後の玉藻像に大きな影響を与え、それは今日の漫画やライトノベル、ゲーム、ご当地キャラクターなどに及んでいると考えられる。

このように、玉藻の前の説話・物語は様々なメディアを通して幅広く展開していき、今日に至っている。そこで本稿では、中世に生み出された妖狐玉藻像の変遷をたどり、九尾化と現代的特色を軸として、大きな動向を把握していきたい。

## 1 玉藻の物語の展開

玉藻の物語が一篇の物語草子に仕立てられたのは、少なくとも一五世紀前半のことである（『諸物語目録』）。当初、玉藻は九尾ではなかった。二本の尾を持つ年老いた狐として描かれている。

今日、玉藻の物語は、妖怪退治をテーマとする物語として捉えられている。もちろん、そうした側面が強いことは間違いないだろう。しかし、中世において、玉藻の物語は犬追物という武術の由来としての側面が強いものだった<sup>1</sup>。また能の題材となることで、下野国の伝説の一つということにとどまらず、公家・武家や商家などに必須の教養となっていた。こうした教養は近代に至ってもなお残っていた。

『玉藻の草紙』は多くの伝本が残されている。川島朋子氏は松本隆信による諸本整理を踏まえて、八系統に分類されている<sup>2</sup>。一五世紀

の古写本・古絵巻から近世の絵入り版本や奈良絵本まで形態が多様であるばかりでなく、その本文も異同が目立つ。中でも後日譚にあたる玄翁和尚の殺生石説話は近世期に流布した系統に見られるもので、いかに広く読まれていたかを窺い知ることができる。

一五世紀に成立したと思われるが、当初から絵巻に仕立てられることが多く、それは近世にも続いた。写本として流布するものも多くあった。幾つかの古記録からは、中世後期以来、公家や武家に書写され、読まれたことが知られる。たとえば戦国期の公家山科言継はその日記『言継卿記』に本物語を読んだことを複数書き留めている（大永八年正月一三日、天文二三年七月二四日、弘治三年三月二一日、永禄一〇年八月一日の各条）。『連々令稽古双紙以下之事』という寺院の子ども達のための読書リストにも「非情成仏絵」<sup>一帖</sup> ○玉藻<sup>二帖</sup> 伏屋<sup>一帖</sup> ○村松<sup>一帖</sup>とあり、前後の『非情成仏絵（付喪神絵巻）』『伏屋（伏屋の草子）』と並んで本書の名が挙がり、読書対象となることがわかる<sup>3</sup>。

要するに『玉藻の草紙』という物語作品は、『酒吞童子』や『文正草子』『物くさ太郎』と同様に、お伽草子の中でも時代を超えてよく読まれたものだったと評されるだろう。

さらに能「殺生石」や絵巻を通して、つまり文学としてだけでなく、演劇や絵画としても、玉藻の物語は展開していったわけだ。当然、物語草子から芸能、絵画、祭礼等の作り物にもなった。作り物としては、名古屋の天王祭や大津の大津祭（一七世紀初頭）の山車「殺生石山（玄翁山）」、『伊勢参宮名所図会』に見られるものなどがある。大津祭のものは、伝承では万治元年（一六五八）とも、寛文二年（一六六二）に作られたともいう<sup>4</sup>。その一方で、反対に能「殺生石」の舞台が絵巻や絵入版本に見える玄翁和尚の挿絵に影響を与えているという関係も見

られる点<sup>5</sup>にコンテンツとしての豊かさがある。

このように、近世前期、『玉藻の草紙』は絵巻として作られ、また絵入版本として流布していった。版本や一部の絵巻など、後から作られた伝本には玄翁和尚による殺生石の後日譚が追加されているし、絵にも能「殺生石」の影響が出てきた。その後も読み継がれ、江戸後期にも新たな写本がいくつも作られることになるし、説話としていくつかの文献に記載されることにもなる。

はやくは元和三年（一六一七）頃に成った『後太平記』巻三四や『簠簋内伝』の注釈書『簠簋抄』、林羅山の『本朝神社考』のような稗史や思想系の書に見られる。その一方で一七世紀後半には殺生石のある下野国の那須の地誌『那須記』にも記されるようになった。さらに玄翁和尚の伝記として『海蔵寺開山伝』が編まれ、これを通して玉藻説話は流布した。それと並行して玉藻を題材にした新作の読み物や芸能が作られるようになった<sup>6</sup>。一七世紀末に成った橘宗重文・長谷川等雲画の絵手本『絵本宝鑑』に立項される「殺生石」は能の舞台をモデルに描かれている。

当然、物語作品としても、ジャンルを越えて『玉藻の草紙』や謡曲「殺生石」に基づくものがいくつも作られることになった。巨視的にみると、近世後期の文化文政期は玉藻の物語にとって大きな変化の時代だったと思われる。この時期、多くの新作が作られたのである。一種のブームであったのではないかと思われる。

この時期に顕著なのは、玉藻の物語そのものを焼き直すのではなく、天竺↓中国↓日本、もしくは中国↓天竺↓日本、中国↓天竺↓中国↓日本と経巡る三国伝来の型をストーリー展開に反映させたことであろう。これについては次章で詳述する。

明治以降も、饗庭篁村の「新殺生石」（一八九〇年）をはじめとして、

散発的に玉藻を扱ったものが生まれることになるが、どれも三国伝来の型を踏襲していく。これには岡本綺堂の『玉藻の前』の影響が大きいものだったと思われる。岡本経一「婦人公論の三篇」には次のように記されている<sup>7)</sup>。

次は六年十一月からの「玉藻前」で、当時最も一般に受けた小説で、今日でも当時の印象を懐かしく語る人が多い。戦後にもラジオで連続放送をした。作者も愛着の深い作品と見えて、後に平凡社の大衆文学全集に半七捕物帳と共に編入した時、はしがきでかう云つてゐる。「一般の読者はおそらく捕物帳を飲むであらうと想像するが、作者としては更に玉藻前の愛読を望むものである。」伝説の玉藻前をかりて、恋愛の至純性を描いたもので、西洋の伝奇小説からヒントを得たものであらうか。題材に似ぬ清新さが漲つてゐる。見方によれば、これは大人の童話に過ぎないかも知れない。併し緊密な構成、詩情に溢れた浪漫味、伸び／＼と落着いて行儀のよい筆致、今なほ朗々誦すべき文品たるを失はない。綺堂日記によると、これも自ら脚色したかつたらしいが、「思ふところあつて止む」と中絶してゐる。検閲を顧慮した故かも知れない。単行本は七年に天佑社から出たのが最初である。

ここには『玉藻の前』が「当時最も一般に受けた小説」だったと回想されている。また戦後はラジオでも連続放送されたとのことである。玉藻の物語は伝統的に妖怪退治をメインに描かれるものだが、綺堂は陰陽師泰親の弟子という新たなキャラクターを加え、それと玉藻との恋愛という要素を加えた。三国伝来の大妖怪の退治から悲恋の物語という新たな側面を開拓したことで、使い古された三国伝来型がさらに

戦後まで受容されていくことになったのではないかと思われる。

## 2 九尾化

さて、三国伝来型によって浸透したのは、二本の尾ではなく、九本の尾を持つ狐という設定である。つまり九尾の狐だ。

『玉藻の草紙』は、本来、玉藻が宮中に入り込み、正体を暴かれ、那須野で退治されるという、玉藻の事績を描いた作品である。その中に、玉藻の正体が年老いた狐であることを見抜いた陰陽頭泰成が玉藻の過去を語るくだりがある。同内容の玉藻の来歴については一五世紀成立の辞書『下学集』や歴史書『神明鏡』にも見られる。

无<sup>ニ</sup>憚所<sup>ヲ</sup> 申ケレハ是<sup>ハ</sup>下野国那須野ニ有狐也彼狐ト云ハ仁王経ニ昔  
天羅国班足王千人王ノ頸ヲ取テ祭シト云シ塚ノ神是也大唐ニテ褒似<sup>マシ</sup>ト成  
周ノ幽王后<sup>トシテ</sup>終亡<sup>ニ</sup>幽王ヲ<sup>一</sup>已下今此国ニ来テ君悩候君奉レ祭御幣<sup>ヲ</sup>  
役不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>叶由固申セシカトモ勅命ナレハ出玉ケリ

(『神明鏡』国立国会図書館所蔵写本)

泰成が言うには、玉藻の前は下野国那須野の狐である。もともと、天竺の天羅国の塚の神であった。後に中国に渡り、周の幽の後褒似となつて国を亡ぼし、ついで日本に渡つて、現在、天皇を悩ませているという。このように、天竺での事、中国での事は、泰成の語りの中で披露される過去エピソードに過ぎなかった。

ところが、一八世紀末頃、天竺・中国の過去エピソードをそれぞれ増やし、完結した物語とし、天竺・中国・日本の三国の物語を並べて一編の読み物に仕組んだ作品が現れた。これを三国伝来型と仮に呼ん

でおう。曲亭馬琴は『燕石雜志』巻一（一八一〇〈文化七〉年刊）の中で次のように記している。

唐山演義の書に、九尾の老狐化して妲妃となり、紂王を蠱惑せしよしを作りしかば、こ、にも好事のものありて、近衛の帝の宮嬪玉藻の前といふ狐妖を作り出せしは、謡曲の滑稽なるが、何人か序あやしう綴りなして、三国伝来の怪談なりぬ。この草紙久しく写本にて行はれしを、近曾絵にかき板に鏤てますく行はれ、九尾の狐といへば妲妃玉藻が事なり、と儂子も合点せり。

すなわち中国の小説に九尾の老狐が妲己になって殷紂王を誑かし、国を滅ぼした。その後、日本に渡って近衛天皇の時代に玉藻の前という名の女房として宮廷に入ったという風に合成したというのだ。そして、この物語構成が大いに流行り、絵入版本として盛んに行われ、幼童でさえ、「九尾」といえば「妲己」「玉藻」のことだと知るくらい浸透したのだという。

すでに堀誠氏や麻生磯次氏らによって『絵本通俗武王軍談』やあるいは遡って『封神演義』を取り入れていることが指摘されている。そのような改変によって、三国のバランスの取れた読み物に変貌した。そこに描かれる妲己や褒姒の残虐さは目を瞠るもので、自らは手を出さずに権力者を唆して国を傾かせる悪女ぶりを強調しているようである。

先に引いた『燕石雜志』を見るに、馬琴が念頭に置いたのは、高井蘭山『絵本三国妖狐伝』（一八〇四年）、岡田玉山『絵本玉藻譚』（一八〇五年）であろう。江戸と上方で同時期に三国にまたがる金毛九尾の狐の読み物が出され、その後に大きな影響を与えることになったものである<sup>10</sup>。それと同時に、当時の江戸と上方の出版競争を象徴する

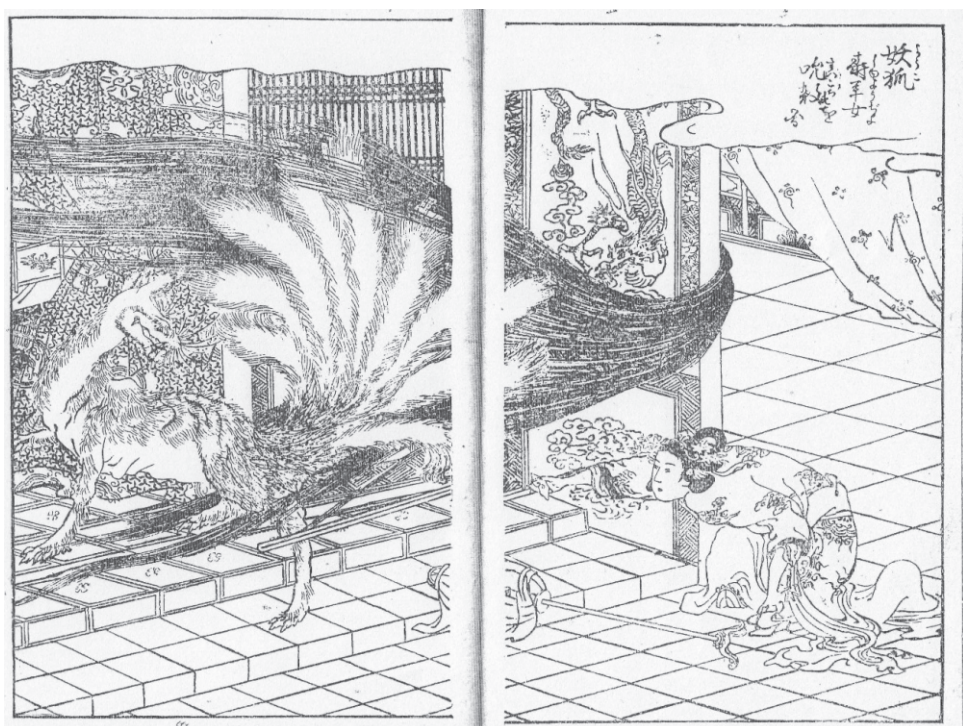
ものでもあった<sup>11</sup>。そうした状況が幕末まで続いたであろうことは、仮名垣魯文の『玉藻前悪狐伝』（一八五五年）の序文から窺われる。

前に妖婦伝玉藻譚あり何も大同小異にしてことふり似たる談柄なれども名だかき標題げだいぞ好ましと書肆ふみやが需もとめに止ことを得ず

つまり、『絵本三国妖狐伝』や『絵本玉藻譚』が出て、どれも大同小異の内容である。しかし、名高い標題だからその新作を作るように、版元に依頼されたというのである。「標題」とは、ここではコンテツと言ひ換えてもいいだろう。三国伝来型の九尾の物語は当時在り来たりのものとなっていたが、それでも需要があるから書くように勧められたというから、文化文政以来の人気コンテンツであったことが窺知されるだろう。

ところでこの時期の作品群に盛んに使われたのが「金毛九尾」「白面金毛九尾」という言葉である。『玉藻の草紙』には「八万歳を経たる狐有り。長七尺たけにして尾二つ有り」と記されている。これが『勸化白狐通』（一七七八年）になると「金毛九尾の野干」となり、高井蘭山『絵本三国妖狐伝』（一八〇四年）では「開闢よりこのかた年数を経て終に姿を變じ、全身金色にして、面は白く九つの尾あり、名づけて白面金毛九尾の狐といへり」（上編巻一）となり、式亭三馬『玉藻前三国伝記』（一八〇九年）では「金毛九尾の狐となり、三浦上総両介が矢先に一身を亡はし、遂には殺生石となり」（唐土）となり、仮名垣魯文『玉藻前悪狐伝』（一八五五年）では「三国伝来白面九尾金毛の老狐」（口絵画申詞）となる。岡本綺堂の『玉藻の前』（一九一七年）も「九月のなかばから白面金毛九尾の狐が那須の篠原にあらわれて」（殺生石）と継承されている。また、為永春水の合巻『新局九尾伝』（一





『絵本三国妖狐伝』

八六六一八七六)のように「金毛九尾玉顔」という表現も派生した。このような状況は、三国それぞれの妖婦、すなわち天竺の華陽夫人、中国の妲己や褒姒、そして日本の玉藻、これら三国の悪女を括るものとして「九尾」が抬頭していったという側面があったと思われる。その結果、玉藻はそこで相対的な優位性を失い、「九尾」がこの妖怪の名前として取って代わる要因になったのではないだろうか。



【図6】「百種怪談妖物双六」(個人蔵)  
に見える「金毛九尾の狐」

そして近代になると、岡本綺堂の『玉藻の前』<sup>12</sup>が人気を博し、一九一七年以来、何度も刊行された。

一九一七〜一九一八(大正六〜七)年『婦人公論』連載。

一九一八年 天祐社から単行本刊行。

一九二九(昭和四)年『岡本綺堂集(現代大衆文学全集一一)』(平凡社)に収録。

一九四九(昭和二四)年『妖姫玉藻前 附・修善寺物語』(筑波書房)に収録。

一九五六(昭和三一)年『岡本綺堂読物選集』八(東京ライフ社)

に収録。

一九六九年 『岡本綺堂読物選集』一（青蛙房）に収録。

一九九二（平成四）年 『修善寺物語 傑作伝奇小説』（光文社文庫）に収録。

一九九九年 『玉藻の前（岡本綺堂伝奇小説集一）』（原書房）刊行。

二〇〇二年 『岡本綺堂妖術伝奇集（伝奇ノ匣二）』（学研M文庫）に収録。

二〇一九年 『玉藻の前』（中公文庫）に収録。

戦後には、これを原作とする小説や映画『九尾の狐と飛丸』（一九六八年）、漫画が作られ、またラジオ朗読や舞台演劇も行われた。

漫画では一九六六年に『週刊マーガレット』で連載されたわたなべまさこの『青いきつね火』が早いものと思われる。ついで同じくわたなべまさこによって、一九七六年に『週刊花とゆめ』で「華陽夫人―天竺編―」「姫妃―中国編―」「玉藻の前―日本編―」と、三回に分けた長編『怪談あやかしの伝説』が掲載された。これは翌年、花とゆめコミックスから単行本として刊行された。



「怪談あやかしの伝説 華陽夫人  
―天竺編―」  
『週刊マーガレット』  
1976年3月5日号

その後、一九九九年にさちみりは『伝記絵巻 玉藻の前』、二〇〇九年に波津彬子『玉藻の前』が出る。しかしどちらも三国伝来型を捨て、玉藻の物語として再構成していることに注目したい。

波津は単行本「あとがき」において、本作品創作以前の段階で、同じ原作をもつわたなべまさこの刷り込みがあったと明かしている。わたなべ作品の二番煎じにせず、独自性を出すことに腐心したものと思われる。それが恐らく天竺編・中国編を省略することだったのではないか。中世近世の日本人の意識としては、三国伝来といえ、それだけで世界を股にかけるイメージがあったが、しかし欧米先進国が世界を主導していると考え、昭和後期の社会では、その世界観は既にそぐわないものとなっている。そこで、天竺・中国のエピソードを大胆に省略し、その代わり、玉藻と陰陽師の弟子の恋愛のテーマを掘り下げていくことで、リアリティのある伝奇として表そうとしたのではないかと解される。

ともあれ、このように、文化文政期以降に三国伝来型が抬頭し、読本・合巻や歌舞伎、浮世絵など、さらには近代以降は小説や映画、漫画など、様々なメディアにおいて発信されることで、今日の玉藻のイメージは形作られていったと考えられるだろう。

### 3 キャラクターとしての玉藻

さて、これまでは物語としての玉藻、あるいは九尾を見てきた。玉藻には平安時代の朝廷を舞台とし、正体を暴く陰陽師がいて、退治する武士の三浦介・上総介がいた。それらを包括するのが玉藻の物語であった。また天竺・中国それぞれの国を転覆させるほどの悪女たちを含め、三国の悪女物語に仕立てて、三国伝来型の九尾の物語となつて

いった。

この流れは岡本綺堂原作の漫画に示されるように、現代まで続いていくわけだが、その一方で、物語そのものよりも玉藻というキャラクターを取り上げるものが近世中期には現れる点に、以下では注目したい。

長谷川等雲が絵を担当した『絵本宝鑑』は、一七世紀末以来、絵手本として広く流布した作品である。その中に「殺生石」と「姐妓」が載っている。これは絵が主で、それを説明する説話が付随した形式の作品だ。「殺生石」は完全に玄翁和尚の偉業を称える書きぶりで記されており、玉藻の前のもとも九尾の狐のことも言及していない。ただ「物ありて此石に憑り」とあるばかりである。一方、「姐妓」には次のような一節がある。

ある節に姐妓と周の褒姒も我朝の玉藻の前も皆狐なり玉藻に至り。化をあらはし。奈須野におゐて。千葉の介上総の介にこそされけると。俗説に伝ふる也

ここではわずかではあるが、玉藻と関連付けて説明されている。

また狩野派の絵師鳥山石燕が『画図百鬼夜行』を作り、その中に「玉藻の前」を取り入れた。玉藻の絵の前後に次のような詞書が付いている。

瑯耶代醉編に古今事物考を引て云商の姐己は狐の精なりと云々その精本朝にわたりて玉藻前となり帝王のおそばをけがせしとなんすべて淫声美色の人を惑す事狐狸よりもはなはだし

ここでは、もはや殺生石の由来は記されていない。

このように、近世も中期を過ぎると、玉藻を物語としてではなく、玉藻というキャラクターに関心が向かう傾向が出てきた。幕末期の歌川国安「見立籠細工口上」や作者不詳の「玉藻前見立角力美人娘」などもその流れで生まれた作品として位置付けられよう。「玉藻前見立角力美人娘」は相撲番付の構成を採った見立番付の一種であるが、作品としては極めて簡略なものである。他に伝本の所在を知らず、分量も少ないので、ここに翻刻紹介する。

〈玉藻前／見立角力〉美人娘

勧進元 玉藻前

大関 淀やばし

扇屋なつ

関脇 大手

笹屋せい

小結 けんさき町

玉屋りう

前頭 大和ばし

よしのやはな

同 相生町

高砂屋まつ

同 松屋町

住吉屋きし

同 今ばし

両替屋ぎん

同 嶋の内

糸屋ぬい

同 あみだ池

かめ屋かう

同 酒辺町

伊丹屋むめ

同 上塩町

あはやいわ

同 梅がへ

衾屋たけ

同 御堂前

はなやしん

同 堂じま

俵屋よね

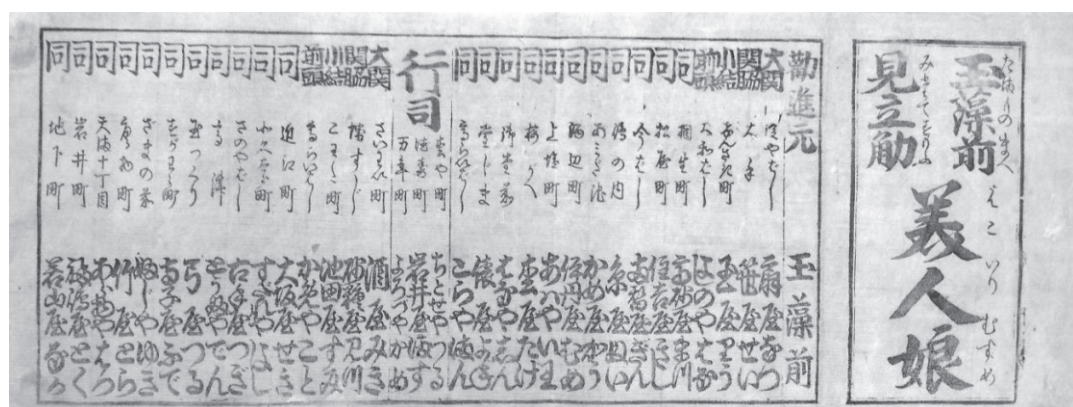
同 高らいばし

とらやまん



同	同	同	同	同	同	同	同	前頭	小結	関脇	大関	行司	衾や町	徳寿町	万年町	さいわい町	堺すじ	こわた町	高らいはし	近江町	北久奈町	さのやばし	高津	玉がわら町	すがわら町	ざまの前	唐物町	天満十丁目	岩井町	地下町
若山屋なか	福嶋屋とく	あら物やはつ	竹屋とら	ふじやゆき	寺子屋ふで	弓屋つる	とうまやでん	古手屋つぎ	すだれやよし	大坂屋せき	かめやこと	池田屋すみ	砂糖屋みつ	酒屋みき	よろづやかめ	岩井屋ます	ちとせやつる													

玉藻の前が勧進元となり、各町の箱入り娘を東西に分け、大関・関脇・小結・前頭と並べている。「見立」とあるから、実在の美人尽しということではなく、いずれも架空の人物である。注釈不要の分かりやすい例を示すと、前頭の大和ばしのよしのやはなは大和国吉野の桜を、相生町の高砂屋まつは謡曲「高砂」を、松屋町の住吉屋きしは名所の住吉をそれぞれ見立てているわけだ。こうした美人尽しの番付の銘に玉藻の前が用いられているのは、玉藻が美人の代名詞として認識



「玉藻前見立角力美人娘」(筆者蔵)



されていたことを示すものだろう。

また、既成の物語を焼き直すばかりでなく、玉藻や九尾の物語を踏まえ、あらたな展開を描くものも出てきた。浄瑠璃の『狐川今殺生石』（二八世紀中期）や市川三升『三国白狐伝』（二八二四年）、柳亭仙果『三都妖婦伝』（一八五二年）などがそうだし、明治に下り、饗庭篁村の『新殺生石』（一八九〇年）や戦後の泉澤太郎『花妖殺生石』（一九七四年）、宗谷真爾『王朝妖狐譚』（一九七八年）なども同傾向にある。

この創作の在り方は、後日譚という設定を採るものもあるが、そうでなくても、本来の物語の〈世界〉、つまり玉藻という主人公ばかりでなく、それを取りまく天皇や陰陽師、武士といった主要キャラクターとの関係性、それぞれの性格や能力、その背景となる時代や舞台設定を踏まえ、それをひっくり返るめて新たな創作を行ったものといえるだろう。読本や合巻、歌舞伎など、物語世界をしつかり描く分野では〈世界〉を踏まえた創作が試みられた。たとえば饗庭篁村『新殺生石』は、明治時代、つまりその当時の現代の九尾楼という遊郭の遊女玉藻が馴染の客源蔵と駆け落ちするが、連れ戻されて改心するものである。

『王朝妖狐譚』は大和朝廷にまつろわぬ古代氏族の末裔の興亡を真言立川流の成立とからめて描いた伝奇小説である。そこに玉藻の物語が融合して独特の中世的世界が表現されている。玉藻の物語については、著者自身、「あとがき」に「高井伴寛の『三国妖狐伝』を読み、大変なことに気づいた。」と記していることから、本作品の資料として使ったことは明らかだろう。とはいえ、三国伝来型を踏襲したものではなく、玉藻をめぐる噂として語られているという趣向に変えて玉藻をヒロインとする物語に回帰している。ただし、蘭山の読本のほうは、妲己↓華陽夫人↓褒姒↓玉藻という展開を見せるのに対して、本

妖狐玉藻像の展開―九尾化と現代的特色をめぐって―

作の噂として語られる玉藻の来歴は妲己↓華陽夫人↓玉藻となっている。これは綺堂の『玉藻の前』と同じである。もちろん他にも式亭三馬の『玉藻前三国伝記』や仮名垣魯文の『玉藻前悪狐伝』をはじめとして、先行する作品にも同じ型を採るものがあるから即断はできないが、そうした一般に入手しがたい作品を参考にしたとするよりも、綺堂作品を経て蘭山作品に至り、両者を素材に用いたと推測することは許されよう。

もう一つの方向性をもつのがパロディ作品である。物語世界からキャラクターを取り出し、別の筋立ての中に取り込んでいく戯作も作られた。

吞龍軒の『玉子の前由来』の「玉子の前」は言うまでもなく「玉藻の前」の洒落である。内容は魚づくしの地口を随所に織り込んだに過ぎない戯文の一種である。



『玉子の前由来』（筆者所蔵）

また式亭三馬の『玉藻前龍宮物語』は九尾の狐が龍宮の乙姫に化ける所から始まる滑稽な物語である。玉藻の本來持っている国を傾ける悪女、狐の変化などの設定はこの物語でも継承されている。

ところで『玉藻前龍宮物語』のように、背景を捨象してキャラクターを新たな物語に取り込むことは、今日広く行われていることである。通史的にみるならば、これは際立つて見られる現代の特徴といえるのではないかと思われる。

パロディをはじめとする二次創作の手法の一つとして、既成のキャラクターを全く異なる文脈に置くことがある。前提として、作り手と同様に受け手も共通のイメージを持っていることが前提となるから、著名なキャラクターでないと扱いづらい。たとえば一九三六年に発表されたアニメ作品『オモチャ箱 第3話 絵本』（昭和十一年）は、平和に暮らす島に敵勢が侵攻するも、金太郎や桃太郎、浦島太郎、花咲じじい、「猿蟹合戦」の小蟹などがそれぞれの特性を生かして撃退するという児童向けの作品だ。子どもなら誰もが知るキャラクターたちだからこそ、登場させる意味がある。

『玉藻前龍宮物語』もまた同じだ。妖狐であり、悪女であり、国王の寵愛を得て悪逆の限りを尽くすという性格をもつ玉藻をそのまま龍宮に持ち込んでいるのだ。こうした趣向はしかし、玉藻・九尾においては続くことがなかった。

ところが現代、特に九〇年代以降のエンターテインメント作品には、九尾というキャラクター自体がそれぞれの作品に登場する機会が増えてくる。また、『百種怪談妖物双六』のように、妖怪名として「玉藻」ではなく「金毛九尾の狐」や「九尾の狐」という名が用いられることは、近世後期にすでにみられることだ。しかし、現代では物語の中で個体名として使われるようになってくる。

梶田省治『鬼切り夜烏子』（ファミ通文庫）という高校生を主人公とした学園ファンタジー作品がある。二〇〇七年に出た第二巻は京都に修学旅行に行つて事件に巻き込まれるエピソードが描かれている。そこで出会ったお稚児姿の貴人という少年は、九尾の狐が化けたものだ。貴人は武神として晴明という陰陽師に仕えているという設定をもっている。クライマックスで貴人が去っていく場面では、「金色に輝く九本の太い飛行機雲が、京都の空一杯に放射状に拡がっていくのを、夜烏子が見上げている。」と、九尾を連想させる飛行機雲を描写している。この貴人について、登場人物の一人が「あのキュービちゃん、晴明さんと京都を守る約束でもしたんですかね？」と戯れに呼んでいる。本作ではあだ名として「九尾」が使われている。

また、峰守ひろかず『絶対城先輩の妖怪学講座』（メディアワークス文庫）という作品がある。タイトルから窺われるように、井上円了の『妖怪学講義』に示唆されたものである。怪奇な出来事の真実を暴いていくエンターテインメント作品と評される。そのエピソードの一つに、キュービと名乗る女詐欺師が出てくる。すなわち第九巻（二〇一六年）では女詐欺師の名に「九日」<sup>きゅうび</sup>が用いられている。主人公で様々な怪異事件を解決している絶対城は、これを「九尾」として解釈しているのである。

「九尾の狐、あるいは金毛九尾の狐。謡曲などで語られる化け狐だ。有能な美女に化けるのが得意で、インドや中国を渡り歩いて王に取り入って悪政に走らせ、幾つもの国を滅ぼしたとされている。有名だから名前くらいは知っているだろう」

本作では主人公に「九尾の狐はフィクションでもよく用いられるモチーフだから」と言わせている。このように、他にも多くの事例が見出せる。

小説以外の例を一、二、挙げると、アニメ作品『妖怪ウォッチ』ではキャラクター名として用いられている。性別は男だが、美しさや強力な妖力を強調しているところに、玉藻の残滓を読み取ることができるだろう。また現在サービスが行われているDMMのゲーム『クリスタル・オブ・リユニオン』にもキュウビというモンスターが登場するが、それは攻略難易度や高めの美しい女性として描かれている。美しさ、強さを相対的に高くすることは、伝統的な設定と見られるだろう。他にも著名なものを幾つか挙げれば、漫画『うしおとら』の白面の者、同じく『NARUTO』の九尾、ライトノベル『いぬかみっ!』のようこ（ヒロイン）、東方プロジェクトの八雲藍（「妖々夢」以降）、携帯ゲーム『おそ松さんのへそくりウォーズ』などがある。

これらの諸例をみると、〈玉藻〉に比べ、今日〈九尾の狐〉の名は物語背景を抜きにして、妖怪名として広く浸透している状況にあると考えられる。〈金毛九尾〉〈白面金毛九尾〉という表現がその名を端的に表すキーワードとして近世後期からしばしば使われてきたが、それ自体、身体的特徴を表すものとして、そのまま妖怪名となり、今日はキャラクター名としても用いられるようになった次第である。

また、九本の尻尾という身体的特徴を人間として描く際にヘアスタイルに反映させる工夫をしたキャラクターも『地獄先生ぬ〜べ〜』や『ほかご百物語』などに見え、九尾が趣向化していることが窺われる。『ほかご百物語』第一巻には「金毛白面九尾の狐」とい

う表現が見えるが（一三〇頁）、「結いあげられていた髪がぶわあつと広がり、九本の束に分かれてぐねぐねと動き出した」と記されている。イラストだけでなく、本文にも趣向が生かされているということができよう。

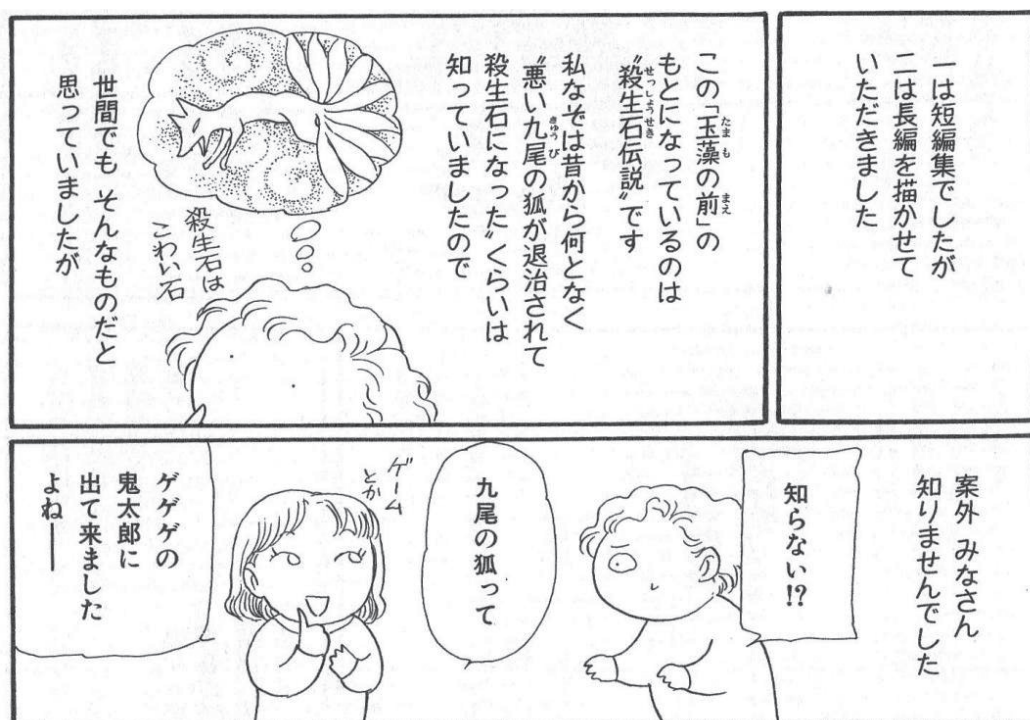
このように、玉藻に対して九尾が使いやすいのは、九尾という名それ自体がキャラクターの特徴を表しているからだと思われる。一反木綿や傘小僧、鎌鼬など、妖怪の名前にしばしばみられるように、名が体を表しているわけだ。

ところが、これに対して、玉藻は名前から視覚的イメージに直結しない。玉藻が九尾の狐であることを理解するには、前提として「殺生石の由来譚」を知っているということが必要となる。しかし、波津彬子の「あとがき」漫画に見られるように、能狂言を教養として求められない現代社会にあつて、玉藻や殺生石は一地方の伝説に過ぎなくなった。もちろん、犬追物は『玉藻の草紙』が作られた時代、つまり一五世紀に盛んにおこなわれ、武家社会でも重視された武術だったが、近世初頭にはすでに珍しいものになっており、そのまま忘れ去られていった。

そうは言っても、女性キャラクターの名前としてキュウビよりもはるかに人名らしさを持っているのがタマモだ。そこで物語背景をもつ性格付け、能力付けをしたキャラクターが登場することが散見される。

赤松中学のライトノベル作品『緋弾のアリア』（MF文庫J）に玉藻と名乗る女性キャラクターが登場する。年齢は八〇八歳で、身体的特徴として失った耳、尾（二本）があり、日常的にランドセル（賽銭箱）を背負った少女の姿をしており、また極めて博識な人物として描かれている（六巻に詳述）。本作に登場する玉藻は少女の姿で描かれているが、長生きをしてきたこと、非常に博識であることがオリジナルの





波津彬子『玉藻の前』「あとがき」

玉藻の前から継承された要素であることとみることができよう。本作  
第二二巻には次のような一節がある。

「児童虐待? バカ言うな。あれは俺より年上だ、何百歳もな。  
戦いとなれば俺が出るが、他の困り事——負傷したり呪いを掛け  
られたりしたら、鵜に頼れ。あいつは万能の異能だ。年の功って  
ヤツでな」

と、半分振り返って説明してくれた。

あー……なるほど。それでやって分かった。玉藻とかそっち系  
のが少女に化けてるんだ、鵜ちゃんは。そーいや、そんな名前の  
妖怪がゲゲゲの鬼太郎に出てたような気がする。

見かけは少女で、中身が長寿という設定は現代ファンタジーではパ  
ンパイアによく用いられるものだ。本作にもそうしたキャラクターは  
登場するが、ここでは日本人キャラクターとして玉藻が相応しいもの  
とされたのだろう。なお、第二二巻には「そーいや、そんな名前の妖  
怪がゲゲゲの鬼太郎に出てたような気がする」という主人公の心内語  
が綴られている。ゲゲゲの鬼太郎に対する言及は右に示した波津彬子  
の「あとがき」にも見られる。現代のクリエイターにおける水木作品  
の影響の一端を窺知できる。

## おわりに

本稿では中世から現代に至る妖狐玉藻の造形について論じてきた。  
最後に以上述べてきたことを簡単に整理しておこう。

本来、妖狐玉藻の物語は「犬追物の由来譚」「殺生石の由来譚」と



して語られてきたものだった。中世のこれら起源譚の中では、天竺・中国の説話は玉藻の過去を語るエピソードとして位置付けられていた（入れ子型）。ところが、近世後期、三国伝来の物語に大幅な増補改変が行われることによって、玉藻の物語（日本の物語）は、〈九尾〉の名のもと、天竺や中国の物語と対等な関係になることとなった。この〈三国伝来型〉において、玉藻は物語の最後を締め括る役割を与えられているとはいえ、全体的には天竺の華陽夫人、中国の妲己や褒姒と同列の扱いとなっている。この型が一八世紀後半から文化文政期をピークに幕末期にかけて、読本・合巻・歌舞伎・おもちゃ絵など、多方面に展開していった。そうした中で、〈玉藻〉よりも三国の妖狐の総称たる〈九尾〉がこの狐の名として優勢になっていった。「白面金毛九尾」「九尾白面金毛」など語の配列はともかく、この時期、これらのキーワードが定着する中で、「九尾」という身体的特徴がこの妖狐を象徴する最も分かりやすい呼び名となった。

近代以降も世界観やキャラクター設定、同じく相関関係など、〈世界〉を含めて玉藻の物語は作られていくことになる。その中で最も大きな影響を与えたのが岡本綺堂の『玉藻の前』であった。これは現代の映画や漫画にも及んでいる。しかし、現代文化では、その〈九尾の狐物〉というべき〈世界〉はコンセンサスを得られなくなっていた。この状況は忠臣蔵や曾我物など、近世から近代にかけて大衆文化の重要なコンテンツとして受け継がれてきた〈世界〉と同じである。大衆文化を考える上で、物語の内容を前提として共有していることは重要だろうと思われる。作り手・受容者間で共有できなくなった玉藻は物語背景を含めて九尾の狐というキャラクター設定情報に集約されることになったのだらう。

今日、大量のキャラクターを登場させるゲームのクリエイターやエ

妖狐玉藻像の展開―九尾化と現代的特色をめぐって―

ンターテインメント系の作家は、ウィキペディアをはじめとする辞典類からデータを引き出し、造形することが多いし、稀に日文研の怪異妖怪伝承データベースを使うこともある。

これらの作中に出て来る九尾をはじめとする古典文芸に育まれてきた妖怪は、物語的な背景は要素としてキャラクターの能力や外形に反映され、まったく異なる世界に登場するようになり、また、九本の尻尾というパーツだけ流用されるようにもなった。玉藻の前は、今はこの段階にある。

#### 【注】

- 1 伊藤慎吾「『玉藻の草紙』と犬追物起源譚」『日本文学論究』第七九冊、二〇二〇年三月予定。
- 2 川島朋子「室町物語『玉藻前』の展開―能〈殺生石〉との関係を中心に―」『国語国文』第七三巻第八号、二〇〇四年八月。
- 3 高橋秀城「東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』筆録者考―東寺宝菩提院俊雄の可能性」『唱導文学研究』第八巻、二〇一二年。
- 4 『天津祭総合調査報告書5 殺生石山』一九七三年。
- 5 前掲2川島論文。
- 6 歌舞伎に関しては、高橋則子「南北と玉藻譚―『三国妖婦伝』と『玉藻前御園公服』―」（鶴屋南北研究会編『鶴屋南北論集』国書刊行会、一九九〇年）参照。
- 7 岡本経一編『綺堂年代記』青蛙房、二〇〇六年。
- 8 堀誠「『三国悪狐伝』と玉藻前説話の変容」『近世文学と漢文学（和漢比較文学叢書7）』汲古書院、一九八八年。
- 9 麻生磯次「洒落本・草双紙・人情本に於ける影響」『江戸文学と中国文学』三省堂、一九四六年。
- 10 前掲8堀論文。
- 11 中村幸彦「読本展回史の一齣」『国語国文』第二七巻第一〇号、一九五八年一〇月。

12 岡本綺堂『玉藻の前』については、千葉俊二「妖狐譚の系譜―『玉藻の前』その他」『物語の法則 岡本綺堂と谷崎潤一郎』（青蛙房、二〇二二年）参照。

【後記】 本稿は第三回東アジア日本研究者協議会学術大会（二〇一八年一〇月二七日、京都リサーチパーク）での口頭発表に基づき作成したものである。

（本学非常勤講師）